

自由な世界

秋田県横手市立横手北中学校

三年 大坂 美聡

シャツシャツ、カリカリ：一枚の白い紙やキャンバスに鉛筆を走らせる。私はこの音が好きだ。こんな音を立てながら、絵を描くこと。これが私の至福の時である。

私にとって絵を描くということは、生きている上で呼吸を行うことと同じくらい当たり前で、欠かせない行為である。大袈裟かもしれないが、そのくらい私は絵が大好きだ。

小さい頃は、おままごとやかくれんぼのような、月並みな遊びとして絵を描いていたように思う。母に聞いたところ、私は、時間を無為に過ごすことが極めて苦手な子どもだったようで、それが紙と鉛筆さえあれば好きなだけ遊べる「おえかき」にはまった理由だろう。そうしてただの遊びだった「おえかき」は、私の生活に食い込んでいった。

私にとって絵を描くことはどういう意味をもつか。絵を好きになった経緯は前述の通りだが、それだけではこんなにも大好きな理由にはならない。絵を描くことが「好き」から「大好き」への境界を越えた理由。それは、おそらく私の性格と強く結びついている。

私は、気持ちや体験を他人に伝えることが不得手

だ。こうやって作文を書いているときも、誰かと話をすると、自分の内面を表白しようとする、面映ゆい気持ちになってしまふ。しかし、自分の思いを絵にすると、驚くほどすんなりと表現できるのだ。日々の喜びや楽しさ、うまくいかないことへの憤りや憂鬱。それらを私は、真っ白な画面に描き表す。自分の考えを、感情を、想像を、自由な空間に創り出していける感覚は、他の何ものにも代え難いほど気持ち良い。このことから、絵を描くことは私にとってのバイタリティーなのだと思付いた。

こうして、絵に対しての思いを膨らませていた私は、中学校生活が始まった頃、両親の勧めで工房に通うことにした。その工房は建物の二階にあり、階段の横の壁にはいくつもの作品が飾られていた。それまで私が描いていた絵は、大きくてもせいぜい四つ切サイズ。それに、私は色を塗るのが苦手だったため、できあがる絵は常に白黒だった。しかし、その日目にした絵画には、私の身長を遙かに超えるキャンバスに、今にも体ごと溶け込んでいけそうなほどリアルに染色された世界が広がっていた。それらの壮大さと美しさに、私はすぐに惹きつけられた。小さな白黒の空間が破裂して、着色された瞬間だった。習い始めたばかりの私に、工房の先生は「好きな時間に来て描けばいいよ。無理に描いて、嫌になっちゃいけないから。」とおっしゃった。何気ない言葉なのに、今も私の記憶に残っているのは、絵はどこまでも自由なんだと、感じたからだろうか。

大人になるにつれて、私たちは責任や役割を負い、決まりを守り、時間に追われるようになっていく。それはそれで正しいし、必要なことなのだが、時には柵のように感じたり、窮屈に思ったりもしてしまう。そんな中で、絵はどこまでも自由なのである。平面の世界だが、絵を描いた作者の願い、想像、時

間がその世界を創っている。そう考えると、平面な絵の奥、それはまるで螺旋階段のように、想像の世界が無限に存在するような感覚になる。工房の先生は、私に絵の可能性を教えてくださいました。

また、工房での絵を描く経験は、私を成長させてくれた。工房で彫刻のデッサンをしていると、どうしてもうまく描けないことがある。デッサン以外でも、思った通りに描けないと、ひどく歯痒くなる。絵を描くことは嫌いにならなくても、自分自身の未熟さを嘆きたくなる時はあった。そうやって、自分の欠点を見つけたたびに、ひたすら練習した。「描けないからやめたい」と思う以上に、強く「描けるようになりたい」と思った。描けないことに対しての辛さより、描き上げたときの幸せが胸を満たした。そして、その技術を教えてくださったのも工房の先生だった。自分に足りないところや新たな知識を教えてくださいました。私には成長できた。

ここまで絵を描くことについて改めて振り返り、私にとっての絵が、自分で思っている以上に大切であることに気付いた。私は生きていく限り絵を描き続ける。言い換えれば、絵を描くことは私にとって生きることである。嬉しいことがあったとき、私はその喜びを誰かと分かち合うために絵を描くだろう。悲しいことがあったとき、私は思いを吐き出すために絵を描くだろう。その絵は、私の思いを見る人に伝え、その人と繋がる。時代や国が違ってても、思いを共有し合うことができる。その可能性が、私に希望をくれる。喜びをくれる。幸せをくれる。そしてそれは私の「ちから」になる。いつか、私の思いが私の描いた絵を通して、誰かと共鳴しますように。